

大橋寛政先生を悼む

—思い出すことなど—

林 彰

(香里中学・高等学校教諭)

大橋先生。先生が天に召されて早くも一年になるうとしています。明治生まれの個性的な先輩たちが次第に姿を消していられるのは、まことに寂しいかぎりです。

昨年の夏、主治医の勧告を振りきって退院されたころお会いした際には、心配していたよりは遙かにお元気そうでしたが、まさかそれから二か月ほどで急逝されるとは思ってもみませんでした。

そのとき、先生は私にむかって、まるで喉を切ったように二時間近くも話しつづけられましたね。京都での病院生活、ご自身の病状について。「もう七十六歳。思い遣すことなし。余りにも長く生きすぎたのだから……」と担当の医者にいわれたそうですが、淡々と語られたこの言葉が、いまだに私の胸に強くのこっています。

この時点で先生は、死が確実にご自分に迫っていることを予知しておられたのではないのでしょうか。

それにつけても想われるのは、四十年以上も前の先生の体験です。ルソンの山岳地帯を敗走に敗走を重ねていたあの断末魔の戦局、五百十四名のうち四十数名の一人として不思議に生き残られた事実、その間の指揮官としての苦惱、カナルバン俘虜収容所の生活と求道の日々——ちょうど大岡昇平の作品の背景と似かよった凄絶無慚な歳月を、さきほどの先生の言葉と結び合わすと、十五歳年下の私にも、そこに含まれている意味の重さがズッシリと伝わってくるのです。一見、平然と口にされたこの言葉には、どれほどの感慨が込められていたのでしょうか。

時代はまったく変わりましたが、私も以上の世代には、おそらく共通の認識が胸の底に潜んでいるようです。「あのときより後は余命。しかし、生かされているからには、懸命に生きねばならぬ——」と。先生の場合には、さらに、「贖罪のために」という一句を付加えることが必要だと思いますが……。

敗戦後の日本人は皆ガムシヤラに生きたのですが、私には、著名な牧師を父君に育てられた先生が生と死を賭けたあの戦場体験から、その後、神学を志された理由が分かるような気がします。

殺さなければ殺されるという狂気の修羅場で余りにも多くの死に直面することは、一個人の人間の思想を抜き難く変質させるに十分で



しよう。戦争への呪咀、人間存在への不信、戦争の根元たる人間の原罪への、観念としてではない、生の経験を通じての把握と開眼は、先生をして直截に、深く、堅く、絶対者である〈神〉にむかわせたはずです。(先生の信仰のなかに立ち入ることは、これ以上、ご遠慮します。私にはその資格がないのですから)。

先生。覚えておられますか。香里に就任されたころ、出張の帰途、伊豆・熱川の宿でビールを飲みながら深夜まで、ご自分の歴史を延々と熱中して話しつづけられたことを。私は、あのとときの先生の寛いだ、優しい、感性にあふれた表情や語り口を忘れることができないのです。「何という孤独な人だろう」と感じました。なぜか「損」ばかりしてきた人だ、とも思いました。あれは、私を聞き手に仮託した先生の自己告白だったのでしょか。

先生には、ときに徹底した頑固さと、妥協のなき、自分にも他人にも厳しい、いわば「裁断型」の思考や処し方がみられました。

問題によっては不寛容とも冷酷(?)ともとれる一面もあったのではないか。しかし、私には、強靱な先生のうち、あの伊豆の一夜でさらけ出された意外な「弱さ」が重なり合

うのです。もし先生への誤解があったとすれば、それは、先生のいわば表現の不足のためではなかったらうか。万事を人間的レベルでしか考えられない私には、そのように思えてなりません。

昭和四十二年秋。私のクラスのT君が、突如、紀州の海に投身自殺をしました。波の荒い日でした。果然自失の父親、担当の刑事と私とで、変わり果てたT君を海底から引きあげた瞬間、ふと見上げる私の目に、はるかな絶壁の上に立ち、慟哭する母親を支えつつ水面の一点を凝視する先生の姿が映りました。夕闇の中でT君の遺体を清めたとき、校長としての先生の頬には涙がいっぱい光っていました。やがて、先生は「可愛想なことをしたね」という代わりであるかのように、「林君、キリスト教教育の敗北です」と、一言ポツリといわれましたね。

先生とは、そういう方でした――。

孤高の士であった先生、信じるところを立派に貫徹された先生、先生の全体像は、今も、私の心のなかに高く聳えているのです。

在天の先生の霊、とこしえに安らぎ給わんことを……。